ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑬

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
加藤　匡人　*Masato Kato*

前回（９月号）では、フランスにおける天理教の「文化」の「翻訳」の一例として、天理日仏文化協会の出張文化活動について触れた。今回は、それよりも更に直接的な「翻訳」の事例として、日仏文化協会が発行していた季刊誌『ル・ジャポン』を紹介したい（以下は、別に注記のない限り、鎌田親彦へのインタビュー［2014 年 11 月 11 日］を基に記述）。

季刊誌『ル・ジャポン』

『ル・ジャポン』（*Le Japon*）は、日仏文化協会が 1979 年～1983 年にかけて発行していた、日仏２カ国語による季刊誌である。各号 40 ページ前後にわたるその内容は、文化だけでなく、歴史、社会、政治、経済、時事と多岐にわたり、天理教ヨーロッパ出張所の年史の記述によれば、「レベルの高い日本文化に関する評論などを掲載した」（天理教ヨーロッパ出張所　1992：114）とされる。発刊当時に日仏文化協会の会長であった鎌田によれば、当時はまだフランス人向けに日本を紹介するような雑誌もなく、テレビや新聞等を含めて、日本に関する情報は無いに等しかったようである。現物を見ると外部団体からの広告も掲載されており、鎌田によればそこからの収入もあったようである。

この雑誌の対象者には、日本に関心のある一般フランス人と日本語を学ぶ大学生に加えて、在仏日本人も含まれていたとされる。年史では、「創刊と同時にフランス国内はもとより日本にある関係機関からも定期購読の申込みが相次ぎ、常に二千五百部を発行」し、「一般書店をはじめパリ市内の日本レストランやキオスクなどでも販売された」（天理教ヨーロッパ出張所　1992：114）とある。鎌田によれば、定期購読の部数は 1,500 部ほどで、購読者には世界的に有名な学者や芸術家、新聞記者が含まれていたようである。

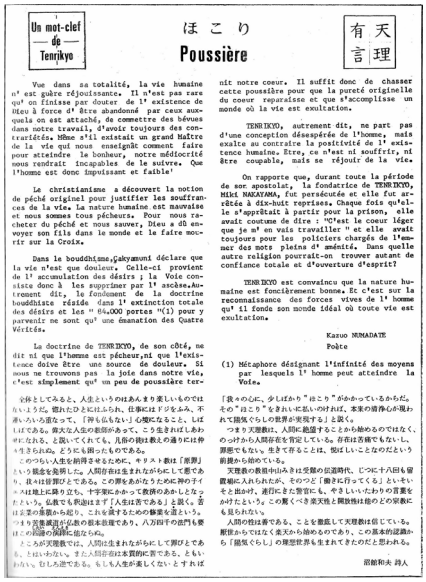
同誌の編集には、ほぼ同時期に発行されていた『天理―心のまほろば―心の本』（別称、『ムック天理』）に編集委員として携わっていた、早稲田大学教授の濱田泰三と東京大学教授の森本和夫の両氏が、その頃にちょうど在外研究者としてパリに来ていたため、両氏の指導と協力を得たと鎌田は語っている。実際の編集作業にあたっては、邦文は当時一人しかいなかった日本人タイピストに頼み、仏文は鎌田らが自分たちで打ち込んだとのことである。鎌田曰く、版の作成から印刷、製本まで全て素人の手作りで、あまり見栄えのしないものであったが、著名人をはじめ多くの読者から賞賛を受けたそうである。



『ル・ジャポン』第１号表紙
（提供：天理日仏文化協会）

年史の記述では、「『ル・ジャポン』により、『天理』の名が広範囲に行き渡り、その果たした役割は大変大きなものであった」と評価されている。この点だけをとらえれば、間接的に「天理」という名前を広めることが目的という意味合いにおいて、前回で紹介した出張文化活動と似たような位置づけになるだろう。

しかしその一方で、この季刊誌では、単に「天理」の名前を広めるだけでなく、より直接的に「天理教」の教えを解説している箇所がある。それは、毎号の巻末に掲載されている「天理有言」という記事である（フランス語では Un mot-clef de Tenrikyo「天理教のキーワード」と訳されている）。


Un mot-clef de Tenrikyo

ほこり
Poussière

有言 天理

Vue dans sa totalité, la vie humaine n' est guère réjouissante. Il n'est pas rare qu' on finisse par douter de l' existence de Dieu à force d' être abandonné par ceux auxquels on est attaché, de commettre des bévues dans notre travail, d'avoir toujours des contrariétés. Même s'il existait un grand Maître de la vie qui nous enseignât comment faire pour atteindre le bonheur, notre médiocrité nous rendrait incapables de le suivre. Que l'homme est donc impuissant et faible!

La christianisme a découvert la notion de péché originel pour justifier les souffrances de la vie. La nature humaine est mauvaise et nous sommes tous pécheurs. Pour nous racheter du péché et nous sauver, Dieu a dû envoyer son fils dans le monde et le faire mourir sur la Croix.

Dans le bouddhisme,Çakyamouni déclare que la vie n'est que douleur. Celle-ci provient de l' accumulation des désirs ; la Voie consiste donc à les supprimer par l' ascèse.Autrement dit, le fondement de la doctrine bouddhiste réside dans l' extinction totale des désirs et les " 84,000 portes "(1) pour y parvenir ne sont qu' une émanation des Quatre Vérités.

La doctrine de TENRIKYO, de son côté, ne dit ni que l'homme est pécheur,ni que l'existence doive être une source de douleur. Si nous ne trouvons pas la joie dans notre vie, c'est simplement qu' un peu de poussière ternit notre coeur. Il suffit donc de chasser cette poussière pour que la pureté originelle du coeur reparaisse et que s'accomplisse un monde où la vie est exultation.

TENRIKYO, autrement dit, ne part pas d'une conception désespérée de l'homme, mais exalte au contraire la positivité de l' existence humaine. Etre, ce n'est ni souffrir, ni être coupable, mais se réjourir de la vie.

On rapporte que, durant toute la période de nos apostolat, la fondatrice de TENRIKYO, Miki NAKAYAMA, fut persécutée et elle fut arrêtée à dix-huit reprises. Chaque fois qu'elle s'apprêtait à partir pour la prison, elle avait coutume de dire : "C'est le coeur léger que je m' en vais travailler " et elle avait toujours pour les policiers chargés de l'emmener des mots pleins d' aménité. Dans quelle autre religion pourrait-on trouver autant de confiance totale et d'ouverture d'esprit?

TENRIKYO est convaincu que la nature humaine est foncièrement bonne. Et c'est sur la reconnaissance des forces vives de l' homme qu' il fonde son monde idéal où toute vie est exultation.

Kazuo NUMADATE
Poète

(1) Métaphore désignant l'infinité des moyens par lesquels l' homme peut atteindre la Voie.

『ル・ジャポン』第１号に掲載の「天理有言」
（提供：天理日仏文化協会）

これは、道友社が教外者向けに発行していた『天地』という雑誌の中にある同じタイトルの記事を転載したもので、『ル・ジャポン』ではフランス語訳を加えた対訳形式で掲載されている。記事の内容は、天理教用語などを教外の詩人が散文で解読したもので、「天理教」という名前は出てくるものの、信仰者が直接的に教えを説くような語り口ではなく、言わば一つの宗教思想として第三者が説明するような形式になっている。

たとえば、第１号に掲載されている「ほこり」に関する記事では、人生における苦難を他宗教がどのように説明しているかを述べた上で、天理教について以下のように述べている。

> ところが天理教では、人間は生まれながらにして罪びとである、とはいわない。また人間存在は本質的に苦である、ともいわない。むしろ逆である。もしも人生が楽しくないとすれば、「我々の心に、少しばかり“ほこり”がかかっているからだ。その“ほこり”をきれいに払いのければ、本来の清浄心が現われて陽気ぐらしの世界が実現する」と説く。
>
> （沼舘　1979：39）

このように、天理教の用語は使われてはいるものの、全体的には一般的な表現で説明されている。もともと教外者向けに書かれた記事をそのまま使っていることもあり、これにフランス語訳を添えることで、日本全般について紹介する『ル・ジャポン』にも違和感なく載せることができたのであろう。

［引用文献］

天理教ヨーロッパ出張所編『天理教パリ出張所 20 年史』天理教ヨーロッパ出張所、1992 年。
天理日仏文化協会編『ル・ジャポン』第 1 号、天理日仏文化協会、1979 年。
沼舘和夫「天理有言『ほこり』」天理日仏文化協会編『ル・ジャポン』第 1 号、天理日仏文化協会、1979 年、39 頁。